

新着案内

町田の文学

2017年8月10日発行 第37号

町田ゆかりの作家や市民の皆さまがお書きになった文学作品のうち、2017年3月から6月末までに、購入または寄贈等により町田市民文学館で受け入れをした主なものをご紹介します。

これらの作品は、町田市立図書館の利用券を使って借りることができます。

なお、貸出中の場合は、リクエストサービスをご利用ください。

また、市民の皆さまがお書きになった文学作品のご寄贈もお待ちしております。

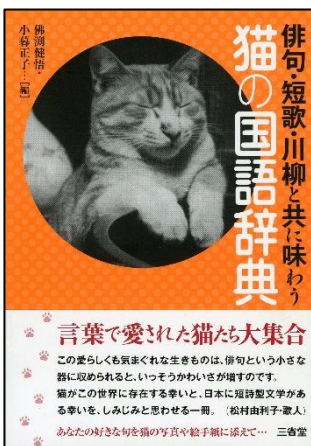
詳しくは、カウンターの職員にお尋ねください。

<著者訪問> 『猫の国語辞典』/ 佛淵健悟さん

昨年末、市内在住の佛淵健悟さんが出された『俳句・短歌・川柳と共に味わう猫の国語辞典』（三省堂）が話題を呼んでいます。「雀羅（じゃくら）」の俳号をお持ちの佛淵さんは、俳句や短歌のほか連句にも精通されていて、文学館でも連句講座の講師などでご協力をいただいています。新著『猫の国語辞典』やご自身と連句の関わりなどについてお話を伺いました。



◇ インタビュー ◇



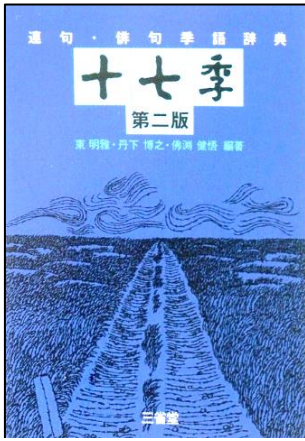
Q：猫が詠まれた句 2,400 と猫に関する言葉を集めた『猫の国語辞典』、とてもユニークな内容ですが、刊行の動機をお聞かせください。

⇒ 共著者の小暮正子さんは三省堂の辞書編集の仕事長くされていた方ですが、猫に関わる俳句・短歌・川柳を収集しデータベース化する中で、多種多様な詠まれ方をしている“猫百態”にいたく興味を覚えられ、“猫の国語辞典”として世に問うてみたら面白いのでは、と思われたのがきっかけです。同じ猫好きとして、私も共著者にと声かけて貰いました。

Q：猫と詩歌には何か特別な繋がりがあるのでしょうか？

⇒ 『枕草子』の初めに、「命婦のおとど」と名づけられた猫に仕える女官が、「翁丸」という犬を軽い気持ちでけしかけて大変なことが起きてしまう話があります。また、『源氏物語』で柏木が女三の宮を垣間見る運命的な場面でも猫が出てきます。神秘的な猫は昔から物語作者や詩人歌人の空想を刺激し続けています。

★『俳句・短歌・川柳と共に味わう猫の国語辞典』（佛淵健悟・小暮正子編 / 三省堂）



『連句・俳句季語辞典
十七季 第二版』

(東 明雅・丹下博之・
佛淵健悟編／三省
堂／2007年)

Q：作家の群ようこさんが、文学館の春の展覧会に寄せられた「オススメ本・30冊」にも取り上げられていました。刊行後の反響は如何ですか？

⇒ お蔭様で、昨年暮れに初版が出てこの6月に2刷と、好調です。

Q：「猫」が詠まれた句をこれだけ集めるのは大変なこと。ご苦労も多かったのでは？

⇒ データベースを作成されたのは小暮さんですが、作品掲載に当たって個々の作品の著作権をクリアするのが大変だったと思います。作業中はTPPによって保護期間が50年から70年に延長されると思われていましたので、それを前提に作業をしましたから。その後、猫についての言い回し・生態・詠み方などで800通りの見出しを立て、そのもとに猫に関する語と、2,400の句作品を収録しました。

Q：ご自身も猫を飼っておられるのですか？

⇒ 飼っています。ただし、ペットとは必ず別れがやってくるので、それはまた、なかなか大変です。

Q：佛淵さんには、これまで当館の「連句講座」の講師や連句通信「風時計」の編集などにお力添えをいただいています。また、文学館を会場に「町田連句を楽しむ会」の世話人として、毎月第4日曜日の午後には連句の実作例会も続けられています。ご自身が連句と出会われたきっかけなどお聞かせください。

⇒ 俳句は連句以前に始めていましたが、30年前どこか俳句の行き詰まりというか、沈滞気味だった時、新宿の朝日カルチャーセンターで東明雅先生の「連句入門」に出会ったのがきっかけです。自然詠だけではない人事百般に向き合う連句のおおらかな人間肯定の文芸に引きつけられました。俳句も勿論続けています。

Q：連句の魅力とはどんなところですか？

⇒ 連句は「座の文芸」と言われるように、複数の人と一坐して付合いをしていく文芸で、他の人と色々なことを話しながら連句一卷を巻き上げていきます。他者の感覚や経験に自分の考えや感性が縋り合わされていきますので、自分の言葉や感性を磨く上でも、楽しく有益です。

Q：これから連句をやってみようという方は、まずどうしたらよいでしょうか？

⇒ 連句を学び楽しむ機会は沢山あります。まず身近で連句をしている会に出てあたりをつけてみるのもいいと思います。町田市民文学館でも毎月1回、「町田連句を楽しむ会(連楽会)」があります。初めはよくわからなかったり戸惑うことも多いと思いますが、連句に飛び込んで実作を重ねているうちに、いつの間にか周りが見えてきて、楽しみも増します。

Q：「雀羅」という俳号、どういう意味なのですか？

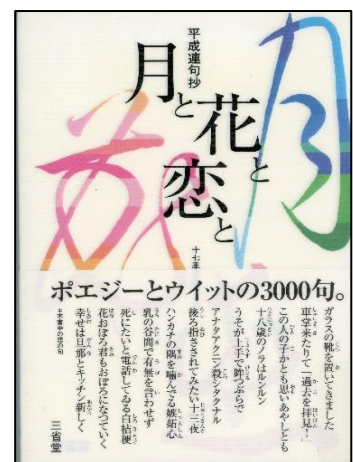
⇒ 俳号のことまで興味をもっていただき恐縮です。ことわざ辞典にあ

—「連句」ひと口メモ—

五七五の長句と七七の短句を、それぞれ別の人間が交互に付け合って、一卷の詩篇にまとめる日本古来の詩歌形式です。中世の連歌を母体として生まれ、江戸の松尾芭蕉によって大成されました。

「歌仙」や「百韻」などいろいろな形式がありますが、前句に想を得て句を付け進み、一卷の中に四季や月、花、恋などを必ず詠み込むことになっています。

明治以降、連句の最初の句(発句)を独立させたのが現在の俳句。近年、連句の面白さが再評価され、インターネットなどでも盛んに行われています。



『平成連句抄 月と花
と恋と』

(『十七季』編集部編／三
省堂／2008年)

る「門前雀羅を張る」の「雀羅」から採りました。これは「門前市をなす」の反対で、雀を捕る網を張って閑を持って余している様です。もっと言えば「雀羅」は雀の羅（うすもの）、着たきり雀、なども連想されます。商売には不向きなネーミングですが、気取って言えば、徒手空拳で言葉の海を渡っていこうという、俳諧作者としてのひそかな心意気も籠めています。

Q：俳諧作者として、ご自身のこれからの抱負やご計画がありましたらお聞かせください。

⇒ 連句が、俳句、短歌、川柳などのジャンルを超える橋渡しが出来ればと思います。高齢化時代の生き甲斐としても、自分を磨き続ける文芸として、また新しい友だちを作っていく上でも、連句は可能性に満ちた文芸だと思えます。

ありがとうございました。



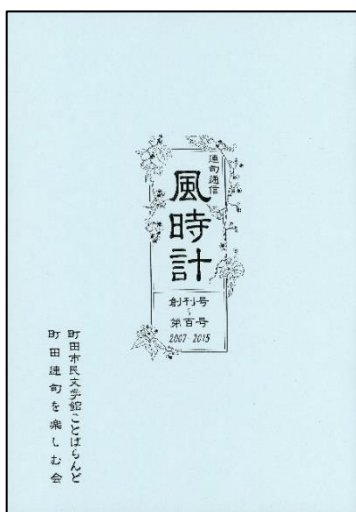
『五七語辞典』
(佛淵健悟・西方草志編
／三省堂／2010年)

【佛淵健悟さんのプロフィール】

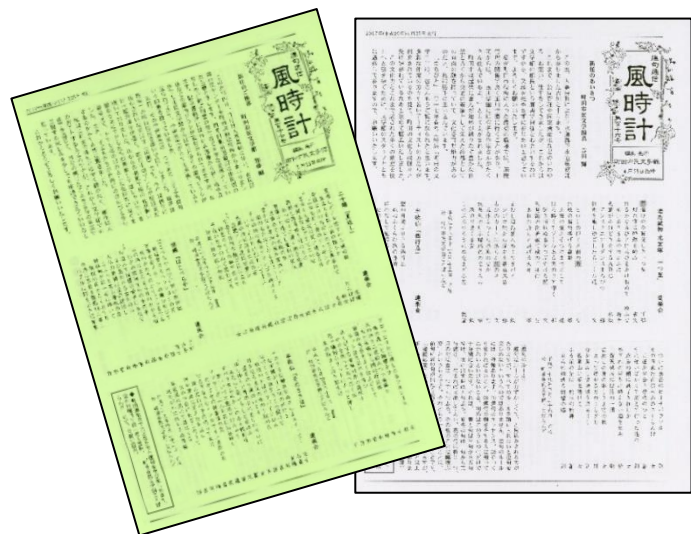
ほとけぶち・けんご。1949年、鹿児島県生まれ。俳号：雀羅（じゃくら）。早稲田大学仏文科卒。俳句は澤村昭代、連句は東明雅に師事。季語研究会同人。2004年、南州庵立机。2001～04年、朝日カルチャーセンター（新宿住友ビル）「連句入門」講師。2007年、町田市民文学館の「連句初級講座」、08年「連句中級講座」、09年「連句上級講座」講師。そのほか、各地の連句や俳句教室の指導を行なう。

『風時計 創刊号～第百号』を刊行しました！

文学館では、町田ゆかりの江戸の俳人、五十嵐梅夫・浜藻父娘にちなんで、連句の普及に取り組んでいます。そのひとつが、町田連句を楽しむ会のご協力により、開館以来毎月発行している連句通信「風時計」。昨年開館10周年を記念して、創刊号から100号までを1冊にまとめて刊行しました。文学館で配布していますので、ご希望の方はカウンターでお申し出ください。



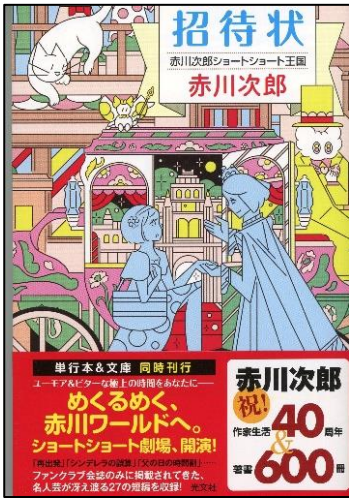
『風時計創刊号～第百号』
A4判 204頁 索引18頁



毎号、巻頭エッセイ、連句作品のほか、「俳文リレー」「紙上連句」を掲載

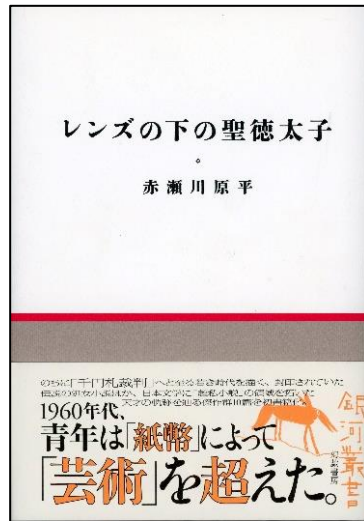


文学



★『招待状』

副題は「赤川次郎のショートショート王国」。ファンクラブの会誌で、会員から募集したタイトルに、著者が書き下ろしたショートショート27篇。文庫も同時刊行。



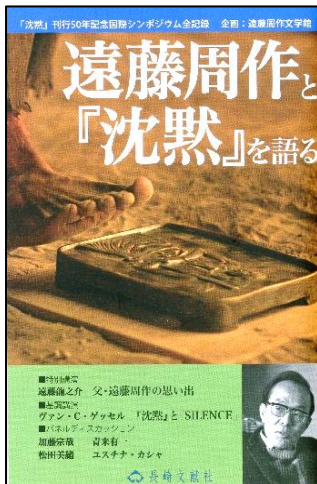
★『レンズの下の聖徳太子』

2014年10月に逝去された著者の単行本未収録小説を精選。「伝説の処女小説」といわれる表題作ほか9作品を年代ごとに収める。



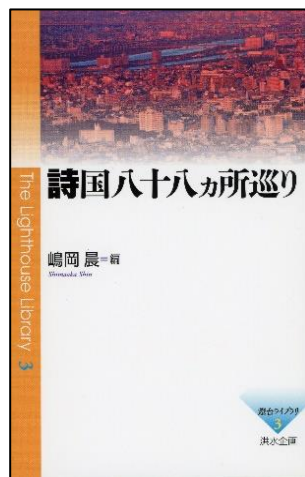
★『人生の踏絵』

『沈黙』の作家による名講演、初の活字化。「帯」「人生にも踏絵があるのだから」「文学と宗教の谷間から」「強虫と弱虫の会おうところ」など9篇を収録。



★『遠藤周作と「沈黙」を語る』

昨年、長崎市の遠藤周作文学館で行われた『沈黙』刊行50年記念国際シンポジウムの記録。ヴァン・C・ゲッセル氏による基調講演のほか、パネルディスカッションなど。



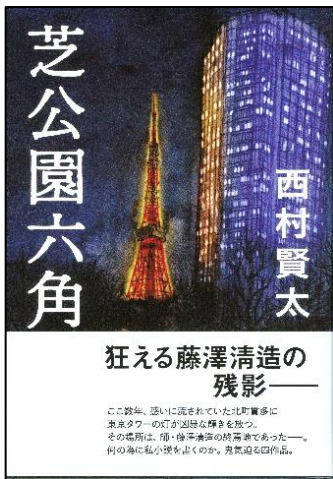
★『詩国八十八カ所巡り』

「四国八十八カ所巡礼になぞらえ、近現代日本を代表する八十八人の詩人の作品を集めて百年の心の歴史をたどるアンソロジー。」（「見返し」）解説・選は町田在住の詩人・嶋岡晨氏。



★『スーパーカブ』

「ホンダ・スーパーカブ 総生産台数1億台記念作。ひとりぼっちの女の子が出会う、1台のバイクと1人の友だち。」（「帯」）著者は町田在住。小説投稿サイト「カクヨム」に小説をお書きとか。



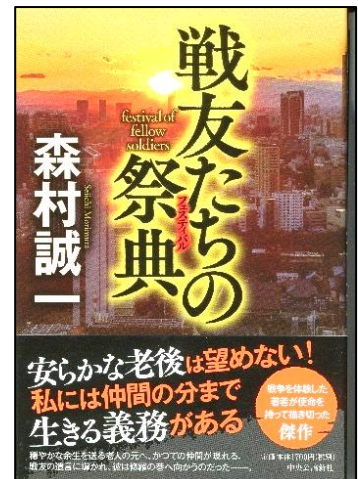
★『芝公園六角堂跡』

「ここ数年、惑いに流されていた北町貫多に東京タワーの灯が凶暴な輝きを放つ。その場所は、師・藤澤清造の終焉地であった。何の為に私小説を書くのか。」（「帯」）表題作のほか「終われなかった夜の彼方で」「深更の巡礼」「十二月に泣く」の4篇。



★『古事記学者ノート』

「神話に魅せられ、列島を旅して」の副題。「浦島太郎」は昔話ではなく恋愛小説。金印〈漢委奴國王〉は偽造、古事記の序は偽書で、律令国家の歴史書ではない……。型破りな説を展開しつつづける〈不良〉研究者のすべて。（「帯」）



★『戦友たちの祭典』

「穏やかな余生を送る老人の元へ、かつての仲間が現れる。戦友の遺言に導かれ、彼は修羅の巷へ向かうのだった。太平洋戦争を生き抜いた男たちが集結。無限の夢を抱えて逝った友の無念を晴らす！戦争を体験した著者が使命を持って描き切った傑作」（「帯」）

タイトル	著者名	出版者	出版年月	分類
★招待状	赤川次郎／著	光文社	2017.2	小説
悪夢に架ける橋	赤川次郎／著	双葉社	2017.2	小説
泥棒たちのレッドカーペット	赤川次郎／著	徳間書店	2017.1	小説
幽霊協奏曲	赤川次郎／著	文藝春秋	2017.3	小説
★レンズの下の聖徳太子	赤瀬川原平／著	幻戯書房	2017.3	小説
★人生の踏絵	遠藤周作／著	新潮社	2017.1	随筆
★遠藤周作と『沈黙』を語る	遠藤周作文学館／企画	長崎文献社	2017.1	小説
★詩国八十八カ所巡り	嶋岡晨／編	洪水企画	2017.1	詩歌
ウィッチンケア vol. 8	多田洋一／制作	yoichijerry	2017.4	文芸誌
★スーパーカブ（角川スニーカー文庫）	トネ・コーケン／著	KADOKAWA	2017.5	小説
★芝公園六角堂跡	西村賢太／著	文藝春秋	2017.3	小説
★俳句・短歌・川柳と供に味わう猫の国語辞典	佛淵健悟／編	三省堂	2016.12	詩歌
★古事記学者(コジオタ)ノート	三浦佑之／著	青土社	2017.1	古典
★ただ一人の異性（光文社文庫）	森村誠一／著	光文社	2017.2	小説
★戦友たちの祭典(フェスティバル)	森村誠一／著	中央公論新社	2017.2	小説

★印の作品は、欄外に書影と紹介文があります。



一般書



★『わたしの好きな子どものうた』

「春がきた」「七つの子」「通りゃんせ」「夕焼け小焼け」など懐かしい童謡 40 曲を短いエッセイと美しい挿絵で綴る。

★『現代子ども文化考』

「出版ニュース」に「子どもの文化」として3年間連載した48篇の文章と関連する小論を収める。常に子どもに寄り添う著者の思い溢れる評論。



“私と「子ども文化」のかかわり”

私が創作児童文学の習作を始めたのが、中学3年の時で、敗戦の翌年、1946年の春だった。爾来70年、何時の時代の子どもの私にとっては興味の対象であった。

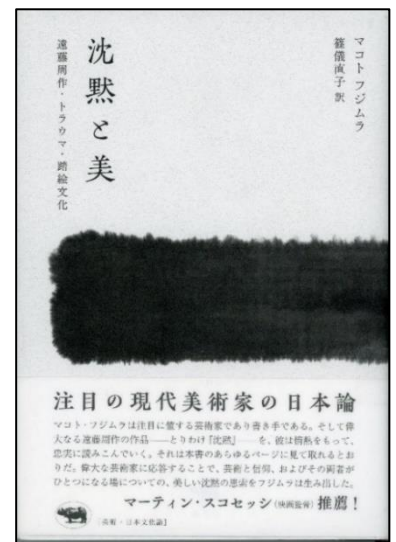


★『沈黙-サイレンス-』

2016年公開のマーティン・スコセッシ監督による映画「沈黙」のプログラム。

★『沈黙と美』

「国際的に評価される現代美術家、マコト・フジムラ。クリスチャンでもある著者が、遠藤周作の『沈黙』に導かれて、深い洞察力をもって挑む日本論」（「見返し」）



注目の現代美術家の日本論

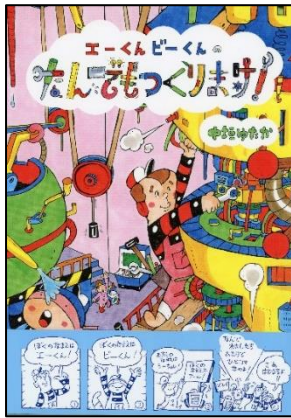
マコト・フジムラは注目に値する美術家であり書き手である。そして偉大な遠藤周作の作品——とりわけ『沈黙』——を、彼は精熟をもって、忠実に読みこんでいく。それは本書のあらゆるページに見て取れるとおりだ。偉大な芸術家に応答することで、芸術と信仰、およびその両者がひとつになる場についての、美しい沈黙の思想をフジムラは生み出した。

マーティン・スコセッシ (映画監督) 推薦!

タイトル	著者名	出版者	出版年月	分類
赤川次郎ミステリー傑作選 幽霊暗殺者編	赤川次郎／著	ぶんか社	2017.3	漫画
デッドデッドデーモンズデデデデストラクション 6	浅野いにお／著	小学館	2017.6	漫画
★わたしの好きな子どものうた	安野光雅／著	講談社	2017.4	音楽
★沈黙	東宝ステラ／編	東宝(株)	2017.1	映画
★沈黙と美	マコト・フジムラ／著	晶文社	2017.2	美術
★現代子ども文化考	山中恒／著	辺境社	2017.3	児童文化



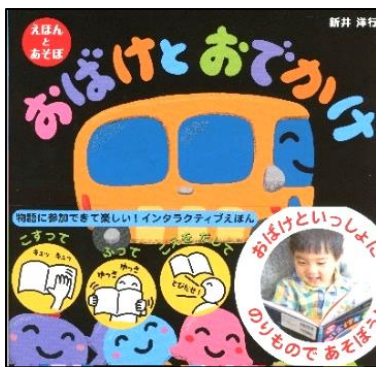
子どもの本



★『エーくんビーくんのなんでもつくりまけ!』



★『タロとチーコのひみつのだいぼうけん』



★『おばけとおでかけ』



★『ふたりユースケ』



★『ねことさかなとなみぼうず』

文学館夏の展覧会
 『ことばらんどでたからさがし！中垣ゆたか』展
 会期：2017年7月15日（土）
 ～9月18日（月・祝）まで
 町田在住のイラストレーター・中垣ゆたかさんの独創的な絵本の世界。左の最新刊『タロとチーコのひみつのだいぼうけん』の世界を展示室内に再現。“たからさがし”を体験してください。

タイトル	著者名	出版者	出版年月	分類
★おばけとおでかけ	新井洋行／作	くもん出版	2017.3	絵本
★タロとチーコのひみつのだいぼうけん	中垣ゆたか／作	小学館	2017.4	絵本
★エーくんビーくんのなんでもつくりまけ！	中垣ゆたか／作	借成社	2017.5	絵本
★ふたりユースケ	三田村信行／作	理論社	2017.2	物語
★ねことさかなとなみぼうず	わたなべゆういち／作	フレーベル館	2017.4	絵本

【主な定期寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸）」

詩誌：「璞（あらたま）」「構図」

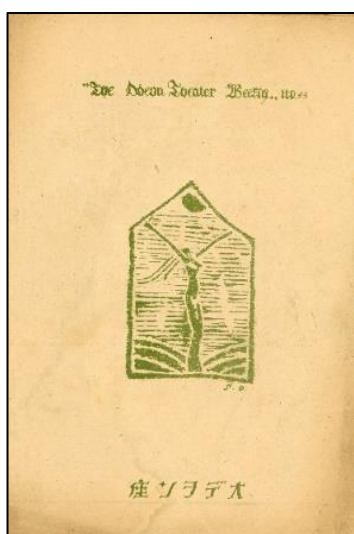
短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

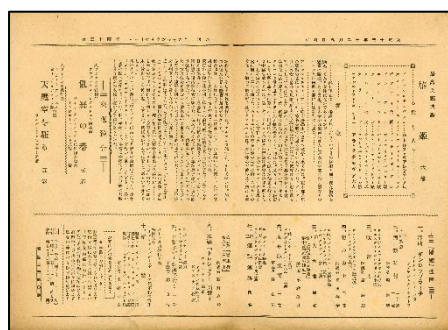
俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「餅（こだま）」「山暦（さんれき）」

「蒼茫（そうぼう）」「都市」「波」「梅林」「風土」「八千草」

大正から昭和にかけての映画館プログラム 「オデヲン座ウィークリー」



「オデヲン座ウィークリー」第43号
(縦175mm×横115mm)



見開きに「最高文藝映畫 椿姫六巻」の配役・梗概のほか次週予告などを掲載。

1911(明治44)年12月、現在の横浜市中区に開業した映画館、横浜オデヲン座をご存じですか。貿易商ニーロップ商会によって創設され、映画がサイレントからトーキーへと移る時期を、日本最初の洋画上映館として映画史に残る数々の名作を上映しました。その後、戦後は進駐軍に接收されるなど幾多の曲折を経ながら、1973(昭和48)年2月まで横浜の一流館として存在しました。新作の公開を意味する「封切り」という言葉は、この映画館から生まれたとも言われています。

そのオデヲン座が、毎週発行し観客に配布していたプログラムが、「オデヲン座ウィークリー」です。『ウィークリーにみるオデヲン座興行記録』(横浜開港資料館/2005年)によれば『オデヲン座ウィークリー』は、震災直後の大正13年1月から発行されたプログラムで、通号893号。太平洋開戦後、洋画輸入が途絶する昭和17年4月まで続いた。当時、プログラムは、映画館独自で作られ無料で配布された。さらには、1週間で番組が替わるので、作成に長い時間をかけられなかったばかりか、紙質も悪く、全国でも長期にわたりとまって残っている事例はまれである。」とのこと。

この「ウィークリー」が、わが文学館の八幡城太郎旧蔵資料の中から、とまって見つかりました。もっとも古いものは1924(大正13)年12月5日の第43号。間に多くの欠号があるものの、1938(昭和13)年2月1日の686号までの177号分、全259点です。

俳人・八幡城太郎は、若い頃に映画監督を夢見て、横浜界隈を彷徨していた時期があります。おそらく彼が青春の思い出として、大切に保存しておいたものでしょう。ほかにも他の映画館のプログラムや入場券の半券、チラシなどもあります。

「ウィークリー」は、横浜開港資料館と横浜市図書館に相当数のコレクションが保存されているようですが、今回見つかった中には両館にない号も数点あるようです。今後、詳しい調査をしなければなりません。



1925(大正14)年公開の映画チラシ。

「町田の文学」第37号/2017年8月10日/編集・発行：町田市民文学館ことばらんど
〒194-0013 町田市原町田 4-16-17/TEL042(739)3420・FAX042(739)3421

*この冊子は300部作成し、1部あたりの単価は309円です(職員の人件費を含みます)。